

西安事变と周恩来

羅瑞卿 呂正操 王炳南 著



西安事变と周恩来

羅 瑞 卿

呂 正 操

王 炳 南

外 文 出 版 社
北 京

西安事变と周恩来

1980年 初版発行

著 者

羅瑞卿 呂正操 王炳南

出 版 者

外 文 出 版 社

(北京阜成門外百万莊)

発 行 者

中 国 国 際 書 店

(北京 P. O. Box 399)

取 扱 店 東方書店(東京) 旺 東 書店(東京)
中 国 書店(福岡)(株)内山書店(東京)
(株)滿 江 紅(東京) 朋 友 書店(京都)
(株)旅原書店(東京) 中 華 書店(東京)

編 号 : (日) 11050-147

11-J-1529P

00110



西安事変の平和解決後 西安から延安にもどって
きた周恩来同志と飛行場に出迎えた毛沢東同志



安西事変後の1937年初め 延安での周恩来同志



1937年 西安駐在八路軍弁事処での周恩来同志と
葉劍英同志（真ん中は国民党の交渉代表張冲氏）

西安事變のころの張學良將軍



西安事變のころの楊虎城將軍



西安の鐘樓の壁にかかっていた当時の標語揭示板
署名は抗日聯軍臨時西北軍事委員會宣傳委員會



西安事變の当日 西安の大通りをデモ行進する軍民





西安駐在八路軍弁事処での周恩来同志の住居

目次

まえがき	1
一 大変動の前夜	7
二 東北軍と十七路軍に対する中国共産党の働きかけ	17
三 国内外を震撼させた西安事変	35
四 西安事変解決の方針	51
五 平和交渉の最初の勝利	63
六 信義にそむいた蔣介石	81
七 機知と沈着で難局を乗切る	93
八 ひきつづき全国の抗日民族統一戦線の樹立のために奔走する	107

まえがき

一九三六年十二月十二日、国民党の愛国將軍張學良と楊虎城が、部下を率いておこした西安事変は、中国の歴史上きわめて大きなできごとであった。西安事変は、中国共産党の抗日民族統一戦線の政策に感銘をうけ、積極的に「内戦停止・一致抗日」を要求した東北軍・西北軍の將兵たちの強い願望と炎のように燃えあがった中国人民の抗日救国運動を背景にしておこったのである。

一九三五年、日本帝國主義は中国侵略に拍車をかけ、中華民族はその存亡をきわめる瀬戸ぎわにおいこまれた。八月一日、中国共産党は『抗日救国のために全国同胞に告ぐ』を発表して、つぎのように呼びかけた。——あらゆる人力、物力、財力、武装力などを集中して抗日救国の神聖な事業につくすために、各政党間に、過去および現在、政見や利害のうえでいかなるちがいがあろうと、また各界の同胞のあいだに、主張や利害のうえでいかなる相違があろうと、各軍隊間に、過去および現在、いかなる敵対行為があろうと、すべてのものが「兄弟牆に闘げど、外その侮りを禦ぐ」という真の自覺をもつべきであり、まずすべてのものが内戦を停止すべきである、と。

一九三五年十月、中国労働赤軍は長征に勝利し、中国革命にあらたな局面をもたらした。このとき華北の情勢はひじょうにきびしく、中国共産党はいっついで二回も宣言を発表し、抗日を願う全国のあるゆる政党、武装部隊、社会団体およびすべての個人が、広はんに団結して抗日戦争を推進するように、かさねて呼びかけた。こうして、一九三五年の「一二・九運動」に始まった抗日救国運動は、一九三六年の春から夏にかけて、全国規模の抗日のたかまりを迎え、民族危機が深まるにつれて、次第に発展していった。一九三六年八月、中国共産党中央委員会は、直接、国民党に文書を送り、ただちに内戦を停止し、全国的な抗日民族統一戦線をうちたて、神聖な民族自衛戦争を発動して日本帝国主義に抵抗し、中国の領土と主権を守り、失地を回復し、中華民族を救うように呼びかけた。つづいて九月一日には、『抗日を蔣介石に強要する問題にかんする指示』を発表した。これは、中国共産党が新しい情勢のもとで、日本帝国主義に反対するために、抗日民族統一戦線の結成を急速に推進させる英明な決定であり、中国共産党が全民族の利益のために、過去の怨恨を水に流した偉大な思想のあらわれであった。

けれども、蔣介石は、中国共産党と全中国人民の正当な要求をかえりみず、「外敵を打ちならうには、まず国内を安んぜよ」という政策を堅持した。

中国共産党の正しい政策と、人民の抗日救国運動の勢いさかんな発展は、国民党内部に激しい

分化をひきおこした。

陝西省北部で赤軍を攻撃していた張学良をかしらとする国民党東北軍と、楊虎城をかしらとする国民党第十七路軍は、「共産党討伐」戦で惨敗をかさね、いっぽうでは、かれらの軍隊の大部分の将兵がみな抗日を願っているため、「内戦停止・一致抗日」という中国共産党の主張を受け入れ、赤軍との交戦を停止し、再三にわたって連共抗日を蒋介石に建議した。蒋介石は、張と楊の両將軍の要求を受けいれないばかりか、直系部隊二、三十万人を陝西省に派遣して赤軍を攻撃し、張、楊両將軍の部隊に打撃をあたえようとした。蒋介石のこの道理を無視した行動は、東北軍と第十七路軍の広はんな將兵の憤激をかった。愛国の熱情にかられている両將軍は、蒋介石が「共産党討伐」を督促するために西安に赴いた機会を利用して、一九三六年十二月十二日に武力を用いて「直諫」を敢行し、蒋介石と当時西安に集中していた蒋介石の軍政要員数十名を逮捕した。そして、蒋介石に迫って、ただちに内戦を停止し一致抗日することを強要した。これが、国の内外を震撼させた西安事変であった。

西安事変の勃発は、国の内外にひじょうに大きな反響をまき起こし、緊張した複雑な局面をつくりだした。もしもこの情勢が発展すれば、中国は二つの前途のうちのいずれかを歩まなくてはならなかった。すなわち、そのひとつはこの事変のために内戦が拡大し、全国の抗日勢力が弱ま

り、抗日戦争の発展をおくらせ、日本帝国主義の侵略に有利な条件をつくりだすことであり、もうひとつはこの事変のために内戦が終息し、全国の抗日民族統一戦線が急速にうちたてられ、抗日戦争がいちはやく実現できることである。すなわち、西安事変を正しく処理できるか否かは、緊張した局面の転換と抗日戦争実現の鍵なのであった。

中国共産党と毛沢東同志は、当時の情勢に科学的な分析を加え、西安事変の平和的解決の方針をうちだした。周恩来同志をかしらとする中国共産党代表団は、西安事変を平和的に解決するために、党と人民の期待をおびて急ぎよ西安へ赴いた。めまぐるしく変化する情勢と複雑かつ激烈な闘争のさなかに身をおいた周恩来同志は、プロレタリア革命家の才能を発揮して、西安事変の平和的解決を実現し、その存亡をきわめる瀬戸ぎわに迫りこまれている中華民族を救うため、不朽の功績をたてたのであった。

平和的な手段による西安事変の解決は当時、局面転換のきっかけとなり、内戦を抗日に転化させ、抗日民族統一戦線の結成と発展を促した。このために中国は国共合作の新しい時期を迎えることができ、全国の各党、各派、各界、各軍は空前の団結をみせ、全面的な抗日戦争を爆発させた。同時にこのことは、中国共産党の統一戦線政策の偉大さと正しさを内外に示し、党の威信をたかめ、革命勢力の発展を促し、日本帝国主義を敗北に導く道をきりひらいたのであった。

西安事変以後、蒋介石が信義にそむいたため、張學良將軍は現在に至るまで、ずっと台灣に監禁されている。楊虎城將軍も十二年間監禁され、獄内で、断固として蒋介石の投降勧誘を拒否しつづけていたが、全国解放の直前に殺害された。この二人は、軍閥に属していたふり軍人のため、当然その思想に弱点や局限性があり、このため西安事変は勝利したものの、最後には完全に避けられる挫折や損失をこうむってしまった。「西安事変は蒋介石自身がつくりだしたのであり、蒋介石の抗日は、張、楊両將軍が人民の意思に従ったために、そうせざるをえなかったのである」、張、楊両將軍は「抗日戦争のために大きな手柄をたてた」という周恩来同志のことばは、まさに当をえているといえよう。一九五六年、西安事変二十周年にさいして、周恩来同志はかさねて、張、楊両將軍の愛国主義の思想と自己犠牲の精神をたかく評価して、かれらは「千古不滅の功労者」であり、その名は永遠に人びとの思い出のなかで生きているといわれた。

この本の筆者は当時みな西安にいた。羅瑞卿は中国共産党代表団の一員として活躍しており、呂正操、王炳南はそれぞれ東北軍と十七路軍のなかで、中国共産党の指導下による統一戦線活動にたずさわっていた。わたしたちはスリルにみちた西安事変を身をもって体験し、平和的に西安事変を解決する闘争のなかでしめされた周恩来同志の崇高な革命的品性をまじかに見てきた。西安事変からもう四十二年たってしまった。周恩来同志はすべての功労を党と人民に帰し、じぶん